

平成 22 年 5 月 11 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520301

研究課題名（和文） 明代詩賛系文学の基礎的研究

研究課題名（英文） A Study of Tales of *Prince Ma Qianlong*

研究代表者

高橋 文治（TAKAHASHI BUNJI）

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：00154857

研究成果の概要（和文）：

中国国家図書館が所蔵する『潜龍馬再興七姑伝』は、敦煌変文『劉家太子伝』の影響を受けて成立した明代の講史小説だと考えられるが、内容や文体の真の起源は仏典故事にあり、そのことは、中国各地に残存する幾多の宝巻、鼓詞、子弟書等の説唱文芸によって立証することが可能である。『潜龍馬再興七姑伝』は、鸚鵡の死と再生を語る宗教的説話にその起源があり、明代の伝奇『蘇英皇后鸚鵡記』も同源の物語を扱い、成化本説唱詞話『全相鸚鵡哥孝義伝』も同じ起源から発した類話だと考えられる。

研究成果の概要（英文）：

The story of *Prince Ma Qianlong* is closely associated with the legend of the *Emperor Guangwu* of the *Han* dynasty, but it can be traced back to the Buddhist-tales talking about the adventures of the parrot that died martyr in the cause of filial duty. The original tales were narrated in the style of Chinese old ballade that was made up of songs and narratives, and probably circulated widely through China by itinerants till 15 centuries, subsequently becoming intermingled with local legends. “*The Seven Ladies Story*”, a work of unknown authorship in 16 centuries tells the story in the style of Chinese traditional historical novel, and “*The Drama of The Parrot*” in 16 centuries recasts the old story in a romantic style of Chinese traditional Opera, while several works of anonymous retained its original tone to the present time with the provincial vernacular as the librettos of local opera and tales.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：中国文学

キーワード：儺戯、農村祭祀、都市文芸、南戯、詞話、説唱文芸、宝巻、弾詞

1. 研究開始当初の背景

1980年代後半より中華人民共和国においては、農村の地方劇「儼戯」が俄かに脚光をあび、仮面を用いるエスニックな特徴とともに、祭祀や儀礼と深く結びついた演劇形態が「生きた化石」として喧伝された。そうした「新発見」は、中国文学史研究に「楽曲系文学」と「詩賛系文学」という新たなパラダイムをもたらし、古典的な文学作品を従来とは異なった系譜で分類しようとする機運をもたらした。中国各地の民間文芸を直接に調査する機会に我々外国人も恵まれるようになり、文化大革命の時期に一旦は根絶やしにされたというさまざまな地方劇、語り物文芸、民衆的な演劇が各地で復興し、日本人による調査をふくめ、その調査報告が種々のかたちで刊行されるようになってきたばかりか、それら新しい情報が、文学史研究のパラダイムを変化させる新たな状況を生み出したといつてよい。

こうした研究状況の変化にあつて、特定の地域の特定の民間文芸の現況を報告するだけではなく、中国における多様な文芸を相互に位置づけ、また関連づけて、その全体的な見通しを得ることが急務となってきた。中国の民衆的な芸能は、その形態も内容も多様であつて、相互に複雑な関係をもっている。単に個別的な文芸の現況を記述するだけでは木を見て森を見ず、特殊な領域の知識を蓄積した評論の一種でしかなくなるであろう。

民間文芸を記述する最も簡単な方法は、それぞれの芸能を形態で区分し、それを羅列することではあるが、しかし、民間文芸に特徴的であるのは、そうした形態的な区分を越えて、互いに共通する特徴や重複する要素が多いことである。より本質的であるのは、それぞれの文芸がもつ社会的な機能であり、その上演がどのように地域社会と結びついていたかなのである。しかも文芸と地域社会との結びつきのあり方は、地域社会の歴史的な発展と並行して、変化してゆく。語り物や演劇といった区分を越えて、文芸という領域全体を、社会との結びつきの中で考えることが可能であるし、また、社会との関わりや実態に密着した、より本質的な文芸の歴史を記述することも可能であろう。

本「明代詩賛系文学の基礎的研究」は、こうした機運の中で、「詞話」と呼ばれる文学ジャンルの特徴を再検討し、「楽曲系文学」と「詩賛系文学」というパラダイムが中国文学史研究にどこまで有効かを再検討し、あわせて、より本質的な文芸史の記述を目指そう

としたものである。

2. 研究の目的

本「明代詩賛系文学の基礎的研究」は、北京の中国国家図書館が所蔵する明代の通俗小説『潜龍馬再興七姑伝』について、版本の特徴を総合的に考察し、その文学史的意義を明らかにすることを目的とした。『潜龍馬再興七姑伝』は、書名さえほとんど知られていない、学会でも未知の資料に属した。

『潜龍馬再興七姑伝』は二巻 39 則。牌記がすでに欠損しているため刊行年代・出版元などは明らかではないが、明末の福建で刊行されたと思われる上図下文の粗雑な版本である。その内容は、「晋王は黄氏のむすめを娶るが、外戚の陰謀により王座を篡奪される。皇后金蓮は冷宮で一子を出産、その子・潜龍馬再興は成長して七人の夫人を娶り、その七人の助力によって晋王の天下を再興する」というものである。

一方、今日の貴州省思南県一帯に残る地方戯「儼戯」の中に『鸚哥記』と『太子売身』という演目がある。これらの演目は乾隆馬再興という太子を主人公とし、『鸚哥記』(上)が母・皇后が太子を懐妊するまで、『鸚哥記』(下)が太子の幼年時代、『太子売身』が太子の青年時代を描き、全体として晋王の息子乾隆馬再興が諸国を放浪しつつ、女性たちの協力を得て家を再興する物語である。『潜龍馬再興七姑伝』と明らかに同一内容である。

「儼戯」の台本は一般に、敦煌変文や「成化本説唱詞話」等の詩賛系文学と同様の文体を用いる。七言詩による「唱」の部分と、散文による「白」の部分からなるのである。また、たとえば安徽省貴池に残存する「儼戯」は、「成化本説唱詞話」数種と同様の内容を扱うばかりでなく、その文言に至るまで完全に一致する部分をもつことが最近明らかになった。「儼戯」は詩賛系文学を台本とし、その台本の起源は時として明代まで遡る。この点から考えるなら、貴州省思南県一帯に残る地方戯『鸚哥記』や『太子売身』の台本も明代まで遡る可能性は十分にある。現に、『鸚哥記』や『太子売身』の台本は、北京の中国国家図書館が所蔵する明代の『潜龍馬再興七姑伝』を襲うものではなく、両者は明らかに文体を異にするが、にもかかわらず、両者の間には表現の一致も多く見られる。このことは恐らく、両者が共通の祖本をもつことを意味するだろう。

また、『潜龍馬再興七姑伝』や『鸚哥記』『太子売身』のストーリーは典型的な貴種流離譚

や再生神話の合成である。中国に古くからある史実や物語、外来の物語等からの借用によってストーリー全体が構成されている可能性が高い。『潜龍馬再興七姑伝』の内容を詳細に分析することは、明代の詩賛系文学、通俗的小説がいかなる来源をもつかを明らかにすることにつながるだろう。

『潜龍馬再興七姑伝』という未知の資料は、要するに、中国文学史のミッシングリングを明らかにする可能性に満ちている。

以上のことをふまえ、本研究は、具体的には以下のことを行う。

- ①『潜龍馬再興七姑伝』の校本を作成する。
- ②『鸚哥記』と『太子売身』の校本を作成する。
- ③『潜龍馬再興七姑伝』と『鸚哥記』『太子売身』の関係を明らかにする。
- ④『潜龍馬再興七姑伝』の物語素材を分析する。

また、あわせて、「詩賛系文学」というパラダイムがどこまで有効かを再検討することも目的とした。

3. 研究の方法

本「明代詩賛系文学の基礎的研究」が具体的に研究は、以下の通りであった。

- ①『潜龍馬再興七姑伝』の校本を作成する。
- ②『鸚哥記』と『太子売身』の校本を作成する。
- ③『潜龍馬再興七姑伝』と『鸚哥記』『太子売身』の関係を明らかにする。
- ④『潜龍馬再興七姑伝』の物語素材を分析する。

本研究の中心的な課題は、北京の中国国家図書館が所蔵する明代の通俗小説『潜龍馬再興七姑伝』を詳細に調査し、また、貴州省思南県一帯に残る地方戯『鸚哥記』と『太子売身』を詳細に調査することであった。したがって、本研究を遂行するためには、北京の中国国家図書館と貴州省思南県一帯に実際に赴き、現地調査を行うことが必須であった。また、本研究課題は単に現地調査を行うだけではなく、『潜龍馬再興七姑伝』という明代の小説、ならびに『鸚哥記』(上)(下)『太子売身』という「儺戯」の内容を詳細に検討する面にもあった。したがって、本研究課題の研究方法は、刊本・抄本の影印を入手してデータ化し、それらを文献学的に解析するというオーソドックスな方法もとられた。

さらに、本研究課題は『潜龍馬再興七姑伝』の物語素材の分析も行うが、この分析のためには、その材料となる伝典故事や神話・説話の調査も不可欠である。このために、本研究は伝典故事や神話・説話の収集と調査した。

平成 19 年度の研究は次の通りであった。

①中華人民共和国・北京の中国国家図書館に出張し、明刊本と思われる『潜龍馬再興七姑伝』の版本としての特徴を調査した。

②中華人民共和国・貴州省思南県に出張し、地方戯として残る『鸚哥記』『太子売身』の上演・台本等を調査した。

③『潜龍馬再興七姑伝』をデータ化した。この作業はすべて研究補助員によって行われた。

④『鸚哥記』『太子売身』の台本をデータ化した。この作業はすべて研究補助員によって行われた。

⑤『潜龍馬再興七姑伝』の版本としての特徴を考察した。

⑥『鸚哥記』『太子売身』の戯曲の戯曲文学としての特徴を考察した。

⑦伝典故事や神話・説話を多く入手し、『潜龍馬再興七姑伝』や『鸚哥記』『太子売身』との関連を調査した。

平成 20 年度は、平成 19 年度に引き続き、同様の研究方法により同様の作業が行われた。ただし、現地における『潜龍馬再興七姑伝』の調査は平成 19 年度に一応完了したので、海外出張による現地調査は台湾のみとした。また、『潜龍馬再興七姑伝』や『鸚哥記』『太子売身』についての論考を執筆する準備を開始した。

平成 21 年度は、明代の伝奇『蘇英皇后鸚鵡記』を調査するため、中華人民共和国に出張した。また、研究成果「馬潜龍太子の物語—説唱詞話は何を語ったか—」を執筆した。

4. 研究成果

本「明代詩賛系文学の基礎的研究」の研究成果を、研究代表者・高橋文治は、2008 年 5 月に東方学会の主催で行なわれた国際東方学会会議第 53 回大会において口頭報告し、また、財団法人東洋文庫東アジア資料研究班編『中国近世文芸論—農村祭祀から都市芸能へ—』(東洋文庫 2009 年 12 月)において「馬潜龍太子の物語—説唱詞話は何を語ったか—」として報告した。

その内容は、要約すればおよそ次の通りである。

「潜龍太子の物語」が残されているのは思南県の「儺戯」や小説『潜龍馬再興七姑伝』のみではない。以下に、筆者が知り得たことを幾つか列してみよう。

先ず第一に、譚正璧・譚尋編『彈詞叙録』(上海古籍出版社 1981 年)は『鸚哥記』の名を挙げ、次のようにいう。「『潜龍馬再興七姑全伝鸚哥記』、簡稱『鸚哥記』、4 卷不分回、無目、不署撰人。1918 年、遵義新城外来党門

好楽三房梓本。同名の「鸚哥記」という鼓子があるが別の物語である。これとは別に「馬潜龍走国」という鼓子があり、これが弾詞と同話である。そのほか、閩劇に『潜龍走国』があり、莆仙戯に『王再興』があり、閩西木偶戯に『七姑救主』がある。

また、稲葉明子・金文京・渡辺浩司共編『木魚書目録』（好文出版 1995年）は、民国初に広東の木魚書として刊行された一〇種の「潜龍走国」を列する。これら一〇種のうち六種は廣州市光復路五桂堂の刊行に係り、筆者はそのうちの二種を金文京氏、松浦恒夫氏のご好意によって目睹したが、内容は全くの同一本でありながら、表紙等は異なっており、刊行年も異なっていたと思われる。このことから推測するに、五桂堂刊の六種は表紙と背記を換えて別種を装った、恐らく同一版本からなるものだったろう。

また、車錫倫編著『中国宝卷総目』（北京燕山出版社 2000年）は、甘肅山丹旧抄本『馬乾隆宝卷』一冊（別名『馬乾隆游国宝卷』）、甘肅民衆旧抄本『王敦造反宝卷』上下二冊、1968年甘肅山丹旧抄本『鸚鵡搬兵宝卷』一冊（別名『殺王敦宝卷』）を著録する。

また、李豫・李雪梅・李英芳・李巍編著『中国鼓詞総目』（山西古籍出版社 2006年）は、その前言において、清朝末の北京に中長篇の鼓詞として「馬潜龍走国」があったこと、1909年以後に上海で複数の「馬潜龍走国」が版刻されたことを述べ、「総目」中では1909年から1940年までに出版されて山西や東北の大学図書館に所蔵される五種の『馬潜龍走国鼓詞』を紹介する。

このほか、金文京氏より『潜龍馬再興鸚哥記』（簡称『鸚哥記』、1巻不分回、無目、不署撰人、重慶双合書店代■、刊年不明）の版本があること、「馬潜龍走国」の類話として『回龍伝』（章回小説、全四二回、道光年間、河北・楽亭県刊）、『回龍伝』の翻案作として『青雲剣』（旧抄本、一函一七冊、影戯、中国芸術研究所・戯劇研究所蔵）があること、また、松浦恒夫氏からは「馬潜龍走国」や『回龍伝』の類話として『慈雲太子走国』（紹興文戯、上海益民書局、活字印刷、刊年不明）があることをそれぞれご教示いただいた。「潜龍走国の物語」は、北京、山西、甘肅、四川、貴州、上海、福建、広東といった各地域に、弾詞、宝卷、鼓詞、木魚書といった「詞話」として残存していたのである。

以上の資料を詳細に検討した結果、次の結論が得られた。

「馬潜龍太子の物語」は恐らく悲哀に満ちた物語だった。この物語における悲哀の強調は、主人公たちの流離にのみあるのではない。この物語に筆者が最初に興味をもったのは、貴州思南の「儺戯」に付けられた「鸚哥記」と

いう奇妙な題名のせいであつたが、「馬潜龍太子の物語」がなぜ一名「鸚哥記（ないし鸚鵡記）」と呼ばれるかは、この悲哀の強調と無関係ではないだろう。前掲「蘇英皇后鸚鵡記」が一名「鸚鵡記」と呼ばれるのはすでに紹介した通りだが、鸚鵡など登場しないに等しい「蘇英皇后鸚鵡記」においても「鸚鵡記」という略称が用いられるのは、八つ裂きにされて無残に殺される鸚鵡というイメージが「馬潜龍太子の物語」と関連したからに違いない。あるいは、一度惨殺された鸚鵡が生き返って活躍するのが「馬潜龍太子の物語」だったと言えるかもしれない。

「馬潜龍太子の物語」では、「七姑伝」系でも「走国」系でも、鸚鵡（ないし鸚哥）は李丞相という名前で登場し、二度死に、二度生き返る。晋王の天下を篡奪した外戚を罵ってその怒りに触れ、毛をすべてむしられて苦痛のうちに絶命するのが一度目の死。二度目は、囚われの馬潜龍の使者として全国に飛んで拳兵をうながし、太子に復命して疲労のために絶命する（甘肅の宝卷では猫に食われて絶命する）。また、一度目の復活は、晋王の忠臣の看護によって羽毛が再生し、「帯孝の真白な鸚鵡」に変身して仏寺に住むことになる。二度目の復活は、太子が与えた稲の粒（甘肅の宝卷では菩薩の靈力）によって再生する。こうした展開の中に死と再生の儀礼が託されているのは言うまでもないが、筆者がここで注目したいのは宗教儀礼との関連ではなく、死者が復活するという不合理を二度まで重ねて苦痛と死を語ろうとする、作者たちのプリミティブな精神である。物語の不合理な展開は作者の素朴な心性の現れである。そして、作者たちがなぜ悲哀を強調したかといえば、苦痛と悲哀とが自己犠牲の感覚と結びついていたからであり、自己犠牲に涙することが宗教的カタルシスや昂揚感を保証したからである。

「成化本説唱詞話」の中には、「永順堂新刊」の標記をもつ「全相鸚哥行孝義伝」という作品がある。この「詞話」は、父を失った子供の鸚哥が母に孝養を尽くすため餌を求めて放浪し、獵師に捕えられ、言葉を話し詩を吟じることができたために次々に転売され、富豪の手から太守へ、太守から都へと献上され、天子の前で孝行心を詠んだ詩を吟じて開放され、故郷に飛び帰るが母の姿はすでになく、観音菩薩の加護によって浦陀山に父母の菩提を弔い、やがて西天に親子団円する、という物語である。この物語、二羽の鸚哥の死を語り仏殿に住む鸚哥を語るなど、「馬潜龍太子の物語」に登場する鸚鵡といくつかの類似点をもつ。が、さらに興味深いのは、甘肅省山丹に残存する説唱文芸に「鶯鶯盜梨宝卷」があつて、その内容が「全相鸚哥行孝義伝」と同話である点である。しかも、甘肅省

山丹の「鶯鶯盗梨宝卷」は、同じく甘肅省山丹に残存する『馬潜龍游国宝卷』と内容の面でも一部共通する。

「詞話」と呼ばれる説唱文芸の最も重要な務めは、恐らく悲哀を語ることだった。その悲哀は、理性によって解析されるような複雑なもの・含蓄のあるものではない。むしろ、語り手たちの境涯に象徴されるような直截的なもの、ないし感情の起伏だけで構成されたヒステリックで激越なものだったはずである。「詞話」は、こうした感情を伝えようとするために原型的な物語しか語りえなかったし、また逆に、作者たちが原型的な物語しか選択し得なかったために、直截的な悲哀以外の感情を盛り込むこともできなかったであろう。

「詞話」は恐らく、中国の都市と農村とを限らず全国津々浦々で語られたはずである。だが、さまざまな情報と理知とに恵まれた都市部の人たち、官僚や富裕層は、悲哀にのみ野放図に傾斜していく粗野な説唱文芸を愛したはずはなかった。こうした芸能・文芸に決定的な影響を受けるのは、ホイジンガが『中世の秋』第一章「張りつめた生活のきびしさ」の中で描いたような、中世的な精神世界に生きる人たちだったろう。農村に生きる人たちは、「詞話」を語る人も聴く人も、一種集団ヒステリーともいえる直截的な悲哀のなかに、みな一様に沈潜していたと思われる。

以上の報告によって研究代表者は、『鸚鵡記』や『太子売身』に代表される説唱詞話等詩賛系文学が、死と再生や人生の悲哀を語る点に特徴があり、それらの特徴は基本的には中国農村の「中世的精神世界」を体現することを明らかにした。また、「馬潜龍太子の物語—説唱詞話は何を語ったか—」に対して、田仲一成博士より「この論文に見える多くの示唆は、今後の研究に大きな視野を開くものといえる」との評価を受けた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

高橋文治「馬潜龍太子の物語—説唱詞話は何を語ったか—」(財団法人東洋文庫東アジア資料研究班編『中国近世文芸論—農村祭祀から都市芸能へ—』第1巻 査読なし pp.159~190) (東洋文庫 2009年12月)

[学会発表] (計1件)

高橋文治「馬再興七姑伝と儺戯」(東方学会国際東方学会議第53回大会 2008年5月)

16日 学士会館(東京都)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋文治 (TAKAHASHI BUNJI)
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 00154857